

研究通信

No. 81

1972年7月刊
村研究会局
社会研究事務 ◇
白梅学園短期大学
社会学研究室
(11研) 内

村研二〇回大会について

去る五月三〇日に開催の第三回合回委員会において、二〇回大会の共通課題ならびに期間・会場予定地が左の如く決定しました。

◇ 共通課題「日本社会における村落と都市」

すでに通信七九号でお知らせした委員会原案、①近代日本社会における村落と都市、②二〇年の成果と課題、の二案について、会員の方々からのアンケート結果に基き検討を行なった。後出のアンケート一覧に明らかのように、右の二つの原案のうち①の支持者がより多くを占めており、また委員会でも②については、実際に適當な大会報告者や年報執筆者が得られるかどうか疑問であるとの意見が出され、結局①の方向に焦点を合わせて考えることになった。

まず、原案では「近代日本……」となつてゐるが、ここで「近代・日本」と限定した場合に、「現代・日本」との係わりが不明確であり、したがつて、近代以降現代までをも含む意味での「日本社会……」と改めることが必要である。さらに、「……村落と都市」の問題についてでは、村研であるから当然、村落社会、を直接の、主な対象とする課題だという前提に立つものであることが確認された。もちろん「都市」と「村落」を同一のレベルで扱うのではなく、あくまでも「村落」を考察の主体とし、「村落」が「都市」からいかなる規定をうけ、また「村落」が「都市」にどのような影響を与えていくか、すなわち村落社会を分析するなかで「都市」がいかにかかわってくるのか、といった程度の位置を「都市」は占めるだけである。

こうした限定が委員会において明瞭にされたうえで、冒頭に掲げたように「日本社会における村落と都市」が共通課題と決定された。なお、共通課題としては焦点が必ずしも明確ではないきらりもあるが、今後の大会で次第に年々問題をしづつしていくこととし、ゆるやかな課題の枠内で、できるだけ多くの会員が報告し、全員が議論に参加できるようになりますと、いふ考えが委員会の大勢を占めた。

◇ 期間 昭和四七年一〇月一一日(水)・一二日(木)

開催予定地 千葉県鴨川市 国民宿舎「望洋荘」

本年度大会開催地は、はじめ東京近郊を予定していましたが、都

心に近いと深夜に及ぶ例年の討論が危ぶまれるし、大気汚染もひどいので、都心を離れ、房総半島の尖端を選びました。場所は、千葉県鴨川市にある国民宿舎「望洋荘」を予定しています。この宿舎は、内房・外房線の終着駅「安房鴨川駅」下車、鴨川湾に面し、外房の海を一眺できる景観地にあります。

いずれ、出張依頼書を添えて、詳しいご案内とご出席の問い合わせをいたします。大会の日時は、一〇月一一日（水）・一二日（木）の両日です。今からこの日時を優先的に確保して下さりますよう念のために申しそえておきます。（図書館短期大学・柿崎）

— 委員会記録 —

第三回運営・編集合同委員会が五月三〇日（火）午後五時三〇分から、東京教育大学社会学研究室において開催された。出席者は、柿崎京一・川本彰・小池基之・島崎稔・中野卓・蓮見音彦・福武直・安原茂・吉沢四郎各委員（アイウエオ願）、事務局（民秋言）の一〇名。

議題は、(1)第二〇回大会の開催について（①共通課題の件、②開催地の件）、(2)年報第八集の件、(3)その他であった。
(1)については前述のとおりであるが、(2)年報第八集の編集については、当初予定されていた掲載原稿の一部に変更の必要が生じ、例年より進行がおくれているが、大会前に刊行できるよう編集をすす

めでいるとの中間報告があった。委員会でこれを了承した。(3)では、(1)会計年度変更の件（内容は次号通信に掲載）、(2)会費納入の件について議せられた。会費納入は従来、郵便振替（東京八〇二二七）のみによっていたが、納入に一層の便宜をはかるため、これと併行して、各年度の事務局が隨時それぞれ銀行にも口座を設けうることにした。

村研大会報告者募集

本年度の共通課題「日本社会における村落と都市」（一頁参照）の報告者、ならびに自由題の報告者を左記のとおり募集します。

各分野の会員の方々から積極的な応募を期待しています。

一、申込切 八月末日

一、報告要旨 四百字詰原稿用紙四／五枚

一、申込先 村研事務局（東京都小平市小川町一ー八三〇・

一八七 白梅学園短期大学社会学研究室

内)

共通課題に関する意見一覧

今年度の共通課題の委員会原案（通信七九号参照）に対して、会員の方がたから左のようなご意見がよせられました。

1. 近代日本社会における村落と都市の線を中心に検討をすすめて下さい。
 2. 「近代日本社会における村落と都市」、どうまとめるかは工夫が必要ですが、興味ある問題です。
 3. △近代日本における都市と村落▽ 具体化はむずかしい面が多くあると思いますが……。
 4. 「近代日本社会における村落と都市」がよいと思います。
 5. 「現代日本の都市と農村」という題目で、二〇回大会に相応しく派手にやつたらよいと思います。
 6. 「現代村落」を中心とする都市化、変革の運動。（詳細は委員会に一任）
 7. 「歴史的発展」の現段階における現代村落の特質を確認する作業を通して、二〇回大会記念の意味をもたせる。
 8. 戦前を含めて、主として戦後に焦点をあわせながら、村落研究における主要な問題点を提示しつつ、問題提起をしていただいたらいかがかと思います。
 9. 委員会案の「近代日本の……」がよくと思う。ただその場合、
10. 研究通信七九号にあるように「近代日本社会における村落と都市」で共通課題はよいと思う。問題は、この課題を追求する視角なり態度にあると思う。現実の農民なり都市の住民の実践に役立つよう研究することが必要だと思う。
 11. 共通課題(2)（二〇年の成果と今後の課題）は疑問。(1)（近代日本社会における村落と都市）でやればよいと思う。共通課題を狭く限定しても、けつきよく各自の研究関心・立場・方法でやる以外にないし、共同討論もお互いの相違を確認するだけといつてもよい結果に終わっているように思えるから。ともかく調査報告を各自の方法に従ってやり、参加者もそれから何かを得るようになります。平凡だがそれがいちばんよい。
 12. 「二〇年の成果と課題」が応じようと思えますが、数多くの研究会を重ね焦点を絞らなければ、実体のない大会に終わることは目にみえてますので、(1)にまとまらざるをえないと思います。その際、△歴史的・段階的発展▽の規定に拘泥しそぎるのは考えものだと思っています。
 13. 行政的な意味での「村」と生活の場としての「村」のくじかい矛盾面を明らかにし、それと共に現状では行政下に「村」としてとらえられたという決定的な事実を無視することなく、日本の「村」を考えてゆく、という視角で歴史的にもう一度整理してみる必要があると思います。

通日本的な把握を必要とし、この点西南日本・畑作・漁村といつたこれまで弱かつた方面も論ずる必要があろう。

14. 歴史的な村、すなわち共同体としての村と、機能集団化してい
る近代の村との関係を明確にしていかないと、日本近代化における農村と都市ということが不明確になってしまふと思われる。
15. 共通課題については、研究会などで理論的に問題点をにつめておく方がよいと思います。別に自由報告の場を設けて、大会の報告も共通課題については基本的な問題点には理論的な形でふれるような報告をふくめて行なうようにしてほしいと思ひます。
16. 共通ということで御苦心の程はわかりますが、近世から現代までは時期が長すぎ、かつ「村落」と「都市」そして「変動」と「変革」のすべてに亘るところになれば抽象的論議に止まらなりようになるとすれば、テーマの羅列だけで終ってしまふ、「共通」の場がボヤけてしまうのではないでしょか。
17. 村落とはなにか→農民とはなにか→農業とはなにか、といったことが問題となつてゐるので、農民或いは農業そのものを解説するようを論議もときにはよいのではないか。
18. 「集団栽培の形態（部落ぐるみと部落の中の一部による集団等）と部落内の人間関係、集団と部落のかかわり、農民層分解等」について検討いただければと思ひます。
19. （前略）戦後の政治・経済の動向が農村の変貌をおし進め、現在それが一つの極地に達していることからかんがみて、今の時点で、村落とは何か、村落を把握する視点、といつた原理的な点での検討が必要と思います。またそれに関連させて、農民意識の把握の方法も再検討する必要があると思ひます。

20. 農村の環境整備計画など幾多の再編成計画がうちだされていま
すが、その計画の主体たる農民の計画に対応した行動の原理的な
諸問題を農村社会学的な点から追求していただきたいと思ひます。
「村落」研究の現代的意義づけを再確認する意味で、各時代ご
との具体的な研究報告を中心に、それをふまえた「村落」研究の
意義の追求と再確認ができるような方法をとつてほし。その際
経済学と社会学の両方の視角設定を配慮して下さい。
21. 22. 村落社会研究の方法。
23. 都市と農村の統一把握のための方法についてもうけてほし。
24. 日本村落の国際的比較研究。
25. 農村の国際比較はどうでしょか。
26. アジアの村落構造についての研究を一つのセクションにしては
どうかと思ひます。
27. 宗教（既成宗派ではなく）とか倫理感といつた Mentality について考察が従来著しく稀薄。教条的な圓式主義の偏向強し。
それでは所詮、堂々めぐりの議論に終るのではないか。
28. 在京委員ばかりが報告者になつてしまふような結果をまねかな
いための反省を伴つた企画でありたい。自由課題は常に可能なよ
うにしておくこと。



◇◇ 研究動向 ◇◇

(※は共同研究)

青井和夫・東大

家族ならびに小集団の研究

※親の育児態度と子の personality

※共働き家族の人間関係

青木志郎・東工大

富山県下の明治後期に散居集落から集居集落に再編成した集落の調査研究

岩本由輝・山形大

諏訪製糸同盟の形成・展開——日本における資労働者創出過程の解説のために——

※「産業構造の変化と過疎進行の東日本と西日本における対比研究」(研究代表者・東北大学齊藤晴造教授)

飯島源次郎・北大

農協の組織論的研究

※酪農の発展条件に関する研究(文部省科研)

上田喜三郎・東教大

市町村合併における小学校とその学区

※東京都府中市における共同調査

大沢敏子・明徳短大

戦時下部落会の研究

※府中市における共同調査

大坪省三・茨城女短大

府中地域町村における交通の変遷と地域社会

※東京都府中市の共同調査

大川健嗣・山形大

「十九世紀末アメリカ農業労働者の存在形態」(文部省獎勵研究)

帝国主義的段階以前のアメリカ国内市場の形成

「東北地方の一山村における人口流出の性格について」(山形大学紀要・一九七二年一月)

※「過疎の東日本と西日本との比較」(文部省特定研究)

川口 蹄・統研

農村社会再生産の論理に関する研究

※農地の所有と移動に関する実証的研究

川越淳二・愛知大

※村落の家族の問題

※村落の家族の問題

川本 彰・明学大

村落の領域構造

※村落の領域構造

菅野 正・宮城教大

村落支配の史的展開

※稻作農業の展開と村落構造

加藤正泰・中大

比較社会学の構想のまとめ

高橋度経済成長期の僻地村落の農民と教育
後藤和夫・奈女大

日本社会学会の仏蘭西の学会への紹介（日本社会学会の
事務担当）

柿崎京一・岡短大

企業進出に伴う村落社会の変容——千葉県君津・富津市

小池基之・慶大
資本主義における土地所有の論理

山村社会と家——岐阜県白川村の事例——

笹谷春美・北大
に關して

大都市近郊村落の変動分析——東京都府中市の事例——

斎藤吉雄・東北大

北原龍二・信州大

東京都府中市の近代篇にかかる諸研究

「コミニティ論」の研究
坂本喜久雄・九大
資本主義的合理化過程の分析と労働者の意識状況の把握

北原糸子

下總牧野における開墾事業と農民

「集落再編成」の論理と現実
坂井達朗・愛知大
末子相続の社会学的研究

木下謙治・山口大

農村の「地域」についての実証的研究

「農工一体化の実態調査」
坂井達朗・愛知大
氏神祭祀組織と社会構造
親族組織

黒崎八洲次良・北教大

戦後の離村離農と部落の社会構造
塩入 力・山梨大
組織論（特に軍事組織）

戦後の農家の経営と部落のかかわりについて——昭和
一二三五年における一農家を中心にして——

理論社会学（特に機能主義理論）

氏神の祭祀組織と村落の構造

島崎 稔・中大

「日本の都市社会論」

「農民の政治的動向」

※鹿島論査

塩野芳夫・神戸山手短大

近世日本の村落（主として畿内の場合）

塩谷政憲・東教大

都市化と寺社関係——多磨墓地前における寺院の成立を

めぐって——

※府中市の共同調査

菅野俊作・東北大

日本農村の労働市場と農業構造

※「皇室財産と日本資本主義」

※「過疎の比較研究」（特定研究）

田口正己・立正短大

「町村合併と社会変動」の研究

竹田聰洲・同志社大

『近世村落の社寺と神仏習合——口丹波山国郷——』
(京都法藏館、三月迄に市販予定)

『日本の民俗（京都）』（第一法規、目下原稿執筆中）

※「家」の研究——同志社大学人文研共同研究

民秋

言・白梅短大

大都市近郊における村落社会の変容過程

※東京都府中市史の編纂

※公害と住民組織——岡山県倉敷市の事例——

戸谷修・岐阜女短大

マレーシアにおける農村構造について

※東南アジアの近代化の研究——各国比較研究——

鳥越皓之・東教大

戰時下における部落統制

※東京都府中市の共同調査

中村正夫・九大

内藤莞爾・九大
対馬村落の研究

内藤莞爾・九大

「末子相続の研究」（来年刊行の予定）

家族の理論

※末子相続の総合研究

中井信彦・慶大

「町村合併と社会変動」の研究
中野 阜・東教大

維新前後における都市と農村の相互連関に関する研究
町村制成立前後と市制下の府中の政治構造を比較するための準備

能登大呑地区漁村における通勤者発生以降の定置網経営と部落内政治構造の追跡調査

※府中市史近代篇を機会として始めた近郊都市形成過程に
関連する共同研究

※倉敷市内三地区における企業公害関係住民の共同調査

中野芳彦・千葉大

村が変革の拠点となりうるトすればそれはどこに求めら
れるか

※公害と住民運動——新潟市山ノ下地区、千葉県銚子市——

二宮哲雄・金沢大

北陸農村の社会構造と社会変動

フィリピン農村の家族と親族

※東南アジアにおける社会・文化変動過程の諸相の研究(一)

東京外国语大学アジアアフリカ言語文化研究所プロジェクト

※佐渡の村落構造(金沢大学日本海文化研究所共同研究)

似田貞香門・東大

一九三〇年代の農村社会学(とりわけ同族論)が資本主義論争といかなる内的連関を有していたかを、有賀一喜

多野一鈴木の線でおいかけている。

※「戦後日本の農村調査の研究」(福武先生中心)

※一九三〇年代の農村離農者と中堅企業労働者との関連

西川善介・専修大

村落社会史の研究、土地所有特に入会林野の研究

西田春彦・大阪大

多次元展開法の多変量解析

※近畿圏の主成分分析

原 宏・島根大

村落構造と祭祀組織

蓮見音彦・東学大

明治から近年までの村落史の展開をふりかえる

※沖縄村落の研究(九学会連合共同調査)

※戦後日本の農村調査の総括

※農業村落の構造と機能に関する研究

長谷川昭彦・明大

地域農業の変動と農村開発

※近畿北部の社会構造の変動(余田博道氏代表)

※都市化と老人(代表増田光吉氏)

箱山貴太郎

稻荷信仰について、歴史的発展段階とその変容について

産業の発展とからみ合せて見て行く

林 稲苗・岐阜女大

代参講の変貌の意味について

林 雅孝・山口女短大

民俗調査・漁村調査

※民俗調査

羽藤貴久子・日本看護協会

土地所有と村落構造

※東京都府中市における共同調査

近郊農村の社会変動と社会教育活動の課題を研究。あわ

せて、社会運動と教育の問題を究明すべく資料蒐集の段階である。

松尾静文・早大

アメリカ農村社会学におけるコミュニティ論の展開について

柳田

民俗学における地域性の把握について

松本通晴・同志社大

村落の解体について

※近畿北部地域における社会構造特質について

樂家

松田苑子・東教大

地域社会と青年団

農業共同化

万野牧男・龍谷大

現代における農村社会の変動——湖東平野の一農村を中心として

心として——

三沢謙一・同志社大

過疎地域の調査（対象地は信州と京都府下）

※京都府下における過疎化と農山村地域開発

官本常一・武美大

民具の調査研究

宮良高弘・札幌大

東北社会の村落構造について

村武精一・都立大

フィリピンの種族社会から民俗社会へ
※九学会連合調査による沖縄研究

※東アジア村落社会の祭祀的世界

安原茂・成蹊大

農村社会学史、柳田国男から戦後に至るまでの村落研究の視野・アプローチ・方法等についての検討

「戦後農民層と村落構造」について整理すること

※鹿島地域調査（島崎教授を中心として）

※戦後日本農村調査について（福武、島崎教授を中心として）

矢島武・北大

農業經濟の Methodologie

※産業構造の変革と稻作經營

※農業の發展条件に関する研究

※日本における農業經營研究史

山本登・大阪市大

部落問題研究

山本陽三・山口大

「農山村地域開発論」

※農山村地域開発研究会（代表喜多野清一）、①農山村地

域開発の実証的研究 ②農工一体化の理想と現実

※「社会の科学」の会（代表山本陽三）、地域生活圈構想
と地域の統合・分化

山本英治・東女大

農民組織

※沖縄の村落

※農村調査の総括

横山勝英・関学大

社会構造（ムラ オトコ）と未解放部落の関連

吉沢四郎・中大

奈良山村の変化——過疎を中心とした林業村落の変化に焦点を当てている。

※鹿島開発と村落（地域社会）の変化（島崎・安原会員ら）

若林敬子・人口問研

日本における学区の社会学的研究

※人口移動調査

綿谷赳夫・日大

西ドイツの農民階層分化とマシーネンリング

食品の生産流通の組織化

○新入会員

戎野真夫 東京大学農学部
千葉市花見川五一一一（平一〇一）

富永静枝 白梅学園短期大学
東京都北多摩郡清瀬町中里一三七九一三三（平一八〇）

（一〇四）

○会員住所等変更（含名簿訂正）

上野 和男 東京都練馬区南田中町六一九 サニーハイツ八号室
(平一七七)

木下 謙治 山口大学文理学部
山口県吉敷郡小郡町大字上郷四〇七一三〇 (平一七五)

（四）
北原 龍二 長野市徳間中ノ割 合同宿舎六五四

北原 純子 同 右
佐々木交賢 創価大学
東京都八王子市丹木町一一二三六 創価大学教員宿

舍 K A H O I (平一九二)
金沢市涌波二丁目一一一三〇 涌波宿舎三一一三 (

一九一〇） 二〇七（一）一六四一八七一〇

花島政三郎
北海道紋別郡

原 宏
松江市内中原町一一五 島根大学宿舎

宮良 高弘
札幌市豊平区西岡四〇四一三〇 二〇一一五八一

一九一七七

山岡 栄市
仏教大学

京都市北区平野上柳町六一一（二）（一）

シャンジーラ
Maeyama Rua Autonio Botelho, 751,

Bela Vista, São Carlos Estado, São Paulo, Brazil

民秋 言 二〇三一四一四一一八五七

（名簿追加）

菅 英一 秋田県雄勝郡雄勝町秋の宮太田

既定の方針を厳守したと思ふます。つきましては、年報第九集の原稿募集を左記の要領でおこないます。
希望される方は、是非、しまから心がけておこして下さる。

記

一、応募要領・題目および要旨（四百字詰三～四枚程度）を、

今年度大会（十月十一、一二日）時までに提出すること。

一、応募者への通知・大会時に編集委員会を開き、大会報告者の中から「依頼原稿」の候補者を選定すると同時に、前記の

「応募原稿」について検討し、掲載原稿の執筆、候補者を決定し、大会終了後ただちに本人に通知する。

一、原稿〆切および掲載原稿の決定・原稿〆切は昭和四八年二月末日、提出された「応募原稿」について編集委員で内容を審査し、掲載の可否を決定する。なお、「依頼原稿」を含め掲載原稿について内容に疑問点がある場合には、再考を依頼することがある。

追記

研究動向の執筆者について。例年、研究動向の執筆者は、編集委員会で人選して決めていますが、適当な方がおられましたら、大会時までに御推薦下さい。

編集委員会

年報第八集は、掲載予定原稿のうち提出期限を大幅に遅れたものがあつて、出版社の方に大変ご無理をお願いをする破目となりましたが、出版社のご好意で、何んとか大会までには刊行できる予定です。右のような事情もあつて、是非次集からは、

× × × ×

村研会員募集

村落社会の研究に関心をおもちの方がお近くにおられましたら、どうか気軽に入会されるようおすすめ下さい。入会希望の方は、白梅学園短期大学社会学研究室内村研事務局へお申込み下さい。申込み次第、会員に登録されます。（入会金不要、会費年額1000円）

事務局から

(1) 左の会員の住所が不明です。通信をお送りすることができませんので、ご存知の方は事務局までご一報下さい。

- 奥田和彦
- 神田嘉延 北大教育学部
- 田中幹夫 東北大教育学部
- 根岸義夫
- 中島寅雄 北海道教育大学釧路分校
- 加藤正泰 中央大学文学部
- 松村安一 東京学芸大学教育学部
- 川合隆男 慶應大学法学部

(2) 会費納入についてのお願い

会員の方々には毎年会費を納入していただいておりますが、まだまだ多額の未納額をかかえています。印刷費の高騰に加えて郵便料金の値上がりによって、村研の財政はピンチに陥っています。七二年度分をふくめて、あなたの会費納入状況は同封別紙のとおりです。多額の未納分をおもちの方は、ここ数年分でもとりあえずお払い下されば幸いです。納入は左のいずれの方法でも結構です。

○ 郵便振替 口座番号東京八〇一二二七 村落社会研究会

○ 銀行払込 第一勧業銀行渋谷支店五〇五一八〇一 民秋 言

同

住友銀行渋谷支店六一一三四九 民秋 言

○ 現金書留 東京都小平市小川町一一八三〇(〒一八七) 白梅学園短期大学社会学研究室内 村落社会研究会事務局

多数の会員の方がたに会費をおさめていただくようご協力をお願いします。

なお、別紙記入額に疑義がございましたら、ご一報下されば幸いです。

